

**F/T13**  
FESTIVAL/TOKYO

ARTS  
COUNCIL  
TOKYO



東京文化発信  
プロジェクト



TOKYO ● 2020

F/T13 イェリネク連続上演

**光のない。(プロローグ?) / 作：エルフリーデ・イェリネク**

**演出：宮沢章夫**

F/T13 Jelinek Series:

**Prolog? / Text: Elfriede Jelinek**

**Direction: Akio Miyazawa**

11.30 (Sat) - 12.8 (Sun)

東京芸術劇場 シアターウエスト  
Tokyo Metropolitan Theatre, Theatre West



# エルフリーデ・イエリネクさんに寄せて

宮沢章夫

まさか自分がイエリネクの作品を演出するとは思っていなかった。ほかにもっとふさわしい演出家がいるのではないか。ましてそれが、〈プロローグ?〉という、なぜいまさらなのか謎めいた作品なのも戸惑うのには十分だ。〈エピローグ?〉の次が〈プロローグ?〉って、いったいなんのことだ。しかし、『光のない。』にはじまる、「光のない」という一連の作品が、ある整理された姿——つまり、これで完結するかのような姿——で私の前にやってきた。けれどまだわからない。さらにべつの「光のない」が書かれるのかもしれないのは、東日本の震災と、それによって引き起こされた原発の事故がほんとうはまだにも解決していないからだ。

『光のない。』が書かれた経緯と、イエリネクの創作の動機について私はなにも知らない。だが、作家のなかに衝撃とともに強い創作の意志が生まれたことは想像できる。しかも、それは安易な方法ではない。かつてあったような劇作法とはまったく異なる姿で形象化されている。

わたしたちのチューニングアジャスターは落ちた。

それは誰の言葉だ。『光のない。』は二人のヴァイオリニストらしき音楽家の対話という形式だから、「チューニングアジャスター」の意味は臆げにわかったところで、「落ちた」というときそれは単に電源が途切れたということの意味しているとは考えられない。そしてまた彼らは言う。

わたしたちはもう横になろう。もはやなすべきことはない。すでに多くの者が横たわる。わたしたちは横になろう、わたしたちの音のそばに。

わたしたちが光。わたしをここから出してほしい、もしきみたちにできるなら！ 奥深くにいる。光？ わたしたちはここだ！ ほら！ ほら！ わたしたちはなんだったのか、わたしたちはなにを言ったのか。

彼らはいまどんな状態にいるのか。そして何者なのか。さらに、〈プロローグ?〉でイエリネクはきわめて挑発的な言葉を刻む。「上演は失敗する、それがわたしにはもう見える、表象の、上演の欺瞞。」と。そしてその直前、「今回もうまくつくりなさい。」とイロニーに満ちた言葉を書く。誰が発話するのだ。イエリネクの「わたし」や「あなたたち」は信用ならない。イエリネク作品の翻訳を手がける林立騎は言う。

「わたし」や「わたしたち」はうつわでありメEDIUMである。なぜなら現代において不変のアイデンティティは存在しえない。同じ「わたし」も時や場所や文脈が違えばまったく別の人間として振る舞い、別の立場を取らざるをえない。「わたしたち」も関係性の中でしか生まれない。

では、「上演は、失敗する」と挑発するのは何者なのか。「今回もうまくやりなさい。」と語っているのは、巧みに演出する手練の演出家への挑発であると同時に、安易に震災や原発事故を取り上げて薄っぺらい〈物語〉を作ることへの警鐘だ。

誰が？ 誰が警鐘を鳴らしている？

「『わたし』や『わたしたち』はうつわでありメEDIUMである」としたら、そして『光のない。』にあった、「わたしたちはここだ!」という言葉を読めば、それが死者たちからの悲愴な叫びに読める。死者は容易に、あとから来る表現者を許してはくれない。

絡んだ糸が丸まっているかのような言葉が織られ一枚の布になったかのような、文字通りのテキストだ。なぜ唐突に、「ついに!」と叫んだのか。イエリネクの意識のなかに電光のようにそれは出現したのだ。リニアに言葉を整理し、構成し、編集しないことによって、読む者はイエリネクの意識の瞬間的な変化を追いかける。いや、それもまた心地よいテキストの読みだ。イエリネクを感じることの悦楽だ。

## 対談：宮沢章夫×小沢 剛

### プロローグ(?) から始まる過去・現在・未来

F/T13で共に『光のない。(プロローグ?)』を手がける美術家の小沢剛と演出家の宮沢章夫。

イェリネク戯曲に取り組みつつ、振り返る二人の〈震災後〉と〈現在〉とは――。

——美術と演劇という異なる文脈から、同じ戯曲を演出することになったお二人ですが、今回のF/Tが初対面だったそうですね。

宮沢 『なすび画廊』を見て、いい意味でふざけたことをしている人だなあ、と好感を持っていたんですよ。まさかこんな形でお会いしようとは。

小沢 ラジカル・ガジベリピンバ・システム見ました。そんな遠くない感じで不思議ですね。

宮沢 演劇との関わりはこれまでもあったんですか？

小沢 大学の頃は演劇部だったんですが、その後は友達のを観たり、ちょっと手伝う程度です。直接的に身体を使う表現とか、そもそも人が人前に出て何かするとか……演劇独特のやり方についていけなくなっちゃって。あと、照明に美術、時間の流れといった色々な要素を一人でコントロールはできないと気づいて、21歳の春に逃げました。でもこの度帰ってきました(笑)。今回だけです。

宮沢 逆に僕は学生時代、全く演劇に縁が無かったですよ。観始めたのも22歳ごろ。だからまさかイェリネクを演出するとは、30年前には想像もしてなかったですね。

小沢 僕は数ヵ月前まで想像してなかった(笑)。

——今回お二人が演出される『光のない。(プロローグ?)』は、3.11に応答する戯曲ですが、お二人は震災の前と後で、どのような変化を体験されましたか。

宮沢 演劇に限らず、私たちには根拠がなくて、不安定な場所に立っているという意識を以前から持っていたんですが、それがすごく観念的だったな

と今は思います。観念で作り上げた無根拠なものの上に、僕はすごくいい加減な感じで立っていた。それで揺れてみると、そもそも土台がしっかりしていないのを強く感じた。俳優たちにはいつも、何かに寄りかかって芝居するな、って言うんですけど、あの日、激しい揺れの中でどこかにしっかりつかまってなきゃ倒れそうな感覚がありました。じゃあ、そんなわたしたちを救ってくれるものは何かを意識し始めましたね。

小沢 僕は震災直後の感情を絶対忘れないようにしたいと思っています。海外で感じた国との距離感とか、向こうで出会った日本人の、実際体験していないぶん凄まじくなっていった思いとか、当時、定着せずうごめいていた感情は、風化させたくないですね。

——震災があっても何も変わらなかったと言う人もいますよね。

宮沢 大きく二つの方向に引き裂かれている気がします。反原発、脱原発の声が高まった反面、それを忘れようとする人もいて。むしろ圧倒的多数が2020年に向かっていく感じで(笑)、政治的にもそう。だから、一方で希望がありつつ不安もあって、安定せず、揺れが続いている感じです。

小沢 なるほど、あの揺り戻しはオリンピックとかと重なってくるのか……。僕は変わったと断言し続けたいですね。「流されたふりをしてるだけで本当は違う」なんて言っている人も、うっかり流されていっちゃうんですよ。かといって、具体的に反政府運動をするとかは考えちゃいません。アートというやり方で表現しようと思っているだけです。



F/T11『トータル・リビング 1986-2011』  
© Nobuhiko Hikiji

——お二人が震災後に作られた作品には、今おっしゃったこともかなり反映されています。

宮沢 震災をはさんで一週間、街の声を拾って、それを元にエチュードを作るワークショップをやったんですね。震災後もなんとか続けたんですが、拾われる言葉がどうしても偏る。例えば「この電車は新宿まで行きますか」とか、「電車は動いていますか」って感じの普通の言葉も、当日、それから数日後と、非常に生々しいものになっていく。それをそのままその年の10月に『トータル・リビング 1986-2011』(F/T11)で使いました。当時はどうしても原発事故のインパクトが大きかったですが、僕は東京に焦点を当てて、その時の距離感とか、今ここがどうなっているのかを描きたかった。それは1986年のチェルノブイリの原発事故と現在がダブったからです。あの時も東京ではさまざまな言説が生まれたけど、どこか80年代という時代性と重なってファッションになってしまった。「何してたんだろう」、「なんで忘れたんだろう」という反省がかなりあり、今、もう一回、それをリアルに自分の感覚として理解し、表現しなければと思った。あの時「スタイル」になりようがなかった言葉はなんだったかと振り返りつつ、街で拾った言葉に託されたものは大きかったです。

小沢 僕は、たまたま震災の半年前に、会津と福島で展覧会があって、むこうの中学校でワークショップもやっていたんです。でも震災直後に美術に何

ができるかって、考えても何も思いつかなかったんです。家の近所のさいたまスーパーアリーナに、双葉町民が避難してきて、居ても立ってもいられず、子供たちのワークショップを企画したりもしましたけど、そういうことは僕以外にもやる人はいっぱいいましたし……。『ベジタブル・ウェポン』シリーズの撮影もしました。これは各地の郷土料理の材料で、銃もどきの作品を作り、モデルに持たせて撮影した後、みんなで食べるっていうもので、これまで世界各地で行っているシリーズです。震災直後の春、福島市内の公民館で花見がてら、比較的安全な野菜を集めて、撮影後にみんなで調理して……。極度の緊張状態にあった福島の知人らは、みんな何週間ぶりに笑ったみたいな感じで、その時はすごくハッピーで「ちょっとはいいことしたな」って思ったら、次の日のニュースで昨日食べたばかりの筍アウトです、山菜危険ですって。「俺はなんてことしたんだ」って悶々としてました。

また『あなたが誰かを好きのように、誰もが誰かを好き』という巨大な布団の山を使ったプロジェクトを福島県立美術館で展示しました。放射線量を気にして外でおもいっきり遊べない子供たちのために、美術館のエントランスにその作品を展示して、のぼったりおりたり転げ回ったりして遊んでもらった。

今年の春には横浜で行われたアフリカ開発会議の関連企画でアフリカをテーマに作品を依頼されました。「今、俺の頭には福島しかないのに困っちゃうな」って思ってたんですが、千円札のあの男、野口英世が閃きまして。彼は福島で生まれ、アフリカで死んだんです。ガーナの看板絵師に、野口の一生と、死後に復活して福島に帰った、というでたらめな僕の妄想も加えて絵にしてもらいました。さらにガーナのミュージシャンに歌にしてもらい会津の高校のコーラス部の歌声とリミックスしたPVにして、看板絵とともに展示しました。

——小沢さんの作品は、展示を前提にした美術と

いう以上の物語性を持っていると思います。とはいえ、突然演劇の演出を頼まれて、驚かれたのではないのでしょうか。

小沢 驚きましたね。ガーナにいたときだったし。しばらく検討していいアイデアが浮かばなかったら逃げちゃえと思ってました(笑)。この戯曲のことも何も知らなかったから、演劇の人ならこれもパッとできるんだろうと思こんでいて。だけども僕には全然分かんない。声に出したり、後ろから読んだり、書き写したり、色々試して、どれも全然駄目なんですけど、いろんな画像が浮かんで消え、っていうのは確実にある。だからその脳内イメージをそのまま使うことはできないかと、脳科学者に相談しに行ったりしました(笑)。

——現時点でお二人がたどりついた、この戯曲に  
取り組むための糸口はどんなものですか。

小沢 結局、反対から読む、をもう一回やってみたら、最後にばーんと「光のない。(プロローグ?)」で終わって、そこで初めて「なるほど、イエリネクは結局これを言いたかったんだ」と気がつきました。そこから劇場を展覧会場に見立て、時間軸を加え、戯曲を「見る」ビジュアル作品を思いついたんです。それでいま、結構真面目に絵を描いたりしています。

宮沢 僕もこの戯曲を完全に理解するのは不可能だとはじめは思っていました。それでTwitterで集めた30人とこの三部作を読み、議論するという大読書会をやって。そこからやっと僕なりの考えが生まれてきました。「上演は失敗する」と繰り返しているのが面白いですね。最初はイエリネクからの挑戦だと感じたんです。震災をテーマにすれば、さまざまなものが作れる、あなたたちこういうものをうまく作るんでしょ、って。だけど、じゃあそういうイエリネクは何様だ、って気もする。その時参加者の一人が、それを語る「わたし」は書き手じゃなくて、震災で死んだ人たちと考えたほうが説得力もあるし、『光のない。』『エピローグ? [光のないII]』を通し

て、語り主体としてより強く感じられるって言ったんです。

また、なぜ最後に書かれたこれが「プロローグ」なのかも議論しました。これは新たな「光のない」のためのプロローグであり、ここからもう一回始まるという希望、次にあなたたちは何を作りますか、って問かけなのかもしれない。だから「上演は失敗する」も、異なる視点から読み直すと、その言葉を乗り越えて、彼ら、つまり死者たちが満足する作品を求めていると思えました。こんな感じで、30人の参加者の言葉に喚起されつつ、改めてテキスト読む気持ちでいま上演台本を作っています。

(2013年10月27日 にしすがも創造舎にて/

構成：前田愛実)



© Nozomu Toyoshima

宮沢章夫(みやざわ・あきお)

1956年静岡県生まれ。90年「遊園地再生事業団」の活動を開始、「ヒネミ」(93年)で第37回岸田國士戯曲賞受賞。『トータル・リビング 1986-2011』でF/T11に参加。その他、小説、評論などの執筆など活動は多岐にわたる。著作に、『14歳の国』(白水社)、『80年代地下文化論』講義(白夜書房)など。10年『時間のかかる読書—横光利一「機械」を巡る素晴らしきぐずぐず』で第21回伊藤整文学賞評論部門受賞。最新作は『ボブ・ディラン・グレート・ヒット第三集』(新潮社)。

小沢 剛(おざわ・つよし)

1965年東京生まれ。東京芸術大学在学中から風景の中に自作の地蔵を建立し、写真に収める『地蔵建立』を、93年から牛乳箱を用いた超小型移動式ギャラリー「なすび画廊」や『相談芸術』を開始。99年には日本美術史の名作を醤油でリメイクした『醤油画資料館』を、2001年より女性が野菜で出来た武器を持つポートレート写真シリーズ「ベジタブル・ウェポン」を制作している。04年に個展「同時に答えるYesとNo!」(森美術館)、09年に個展「透明ランナーは走りつづける」(広島市現代美術館)を開催。

## 水を差す言葉

林立騎(ドイツ語翻訳者)

1946年に生まれ2004年にノーベル文学賞を受賞したオーストリアのドイツ語作家エルフリーデ・イエリネクは、2011年の東日本大震災と福島原発事故を受け、『光のない。』三部作を執筆、11年に『光のない。』、12年に『エピローグ?』、13年に『プロローグ?』を発表した。2012年のフェスティバル/トーキョーではイエリネク特集が生まれ、世界の演劇人の関心が東京に注がれた。

三部作はそれぞれ原発事故後の世界に独自の問題提起をなしており、最後に書かれた『プロローグ?』も同様である。重要なのは後半部でハイデッガーを参照しつつ「表象」に言葉を費やしたことだろう。ハイデッガーの技術論では表象と技術の問いが直接的に結びつく。彼によれば近代以降、ひとは「物」を失い、ただ「在庫」をもつ。「人間」が「主体」として、そしてそこから分離した対象が「客体」として、互いに「前に立てられた＝表象された」ことにより、わたしたちは客体を在庫として扱い、それを効率的に使い尽くす技術を発達させてきた(『ブレーメン講演』『世界像の時代』)。原発事故はその帰結だろう。そしてドイツ語の「表象」は「上演」も意味する。近代以降の表象と技術の歴史に演劇の上演はどう関わったのか。原発事故が表象の歴史の帰結なら、演劇はそれを無邪気に上演できるのか。

わたしたちの社会はこのままの「演劇」を続けていいのか。それが『プロローグ?』の問いだろう。かつて山本七平は、日本でひと・もの・ことが絶対化され「空気」と化すメカニズムを演劇をモデルに分析した。日本社会は出来事に「感情移入」で対応し、それを妨げる者を「敵」と定め、「空気」の「劇場」をつくる。女形は男だと叫んではならないように、この「劇場」は約束事を破らせない同調圧力の場を生み出す。「このまま行けば、日本は[...]」外部の情報を自動的に排除する形になる、いわばその集団内の『演劇』に支障なき形に改変された情報しか伝えられず、そうしなければ秩序が保てない世界になって行く)(『「空気」の研究』、1977年)。

エルフリーデ・イエリネクの演劇言語は、こうした「空気」に水を差す。テキストは、なにかがわかり、束なる経験をもたらさず、表象の時間を中断する。問いが生まれ、その問いも崩壊し、なにもわからなくなり、なにもわからないという経験が共有される場が生まれる。わたしたちの社会は今や巨大な「演劇」と化し、わたしたちはつねに安心させられ、安全を説かれ、揺さぶられることがない。だが動揺の経験、リスクの予感こそ、共有され、社会の根幹をなさねばならないことを、誰もがすでに知っている。社会と演劇の悪しき一致に亀裂がもたらされ、わたしたちを豊かに揺さぶる言葉があらたなかたちで「上演」されるとき、来たるべき演劇は社会との新しい関係を築くだろう。

作：エルフリーデ・イエリネク  
翻訳：林 立騎

演出：宮沢章夫  
出演：安藤朋子、谷川清美、松村翔子、牛尾千聖、大場みなみ

美術：宮沢章夫  
音楽：杉本佳一 (FourColor/FilFla)  
照明：木藤 歩  
音響：星野大輔 (有限会社サウンドウィーズ)  
衣裳：坂本千代  
舞台監督：田中 翼 (株式会社キャピタル)  
小道具：長谷川ちえ  
演出助手：上村 聡、阿部鈴絵  
制作：金長隆子

協力：ARICA、演劇集団円  
制作協力：遊園地再生事業団、株式会社ルアブル

記録写真：青木 司  
記録映像：株式会社 彩高堂「西池袋映像」

F/Tスタッフ  
制作統括：武田知也  
制作：小森あや  
制作アシスタント：十万亜紀子  
フロント運営：遠藤いづみ  
プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：乾亜沙美、植村 真、  
川又美穂、輿水すみれ、菅井新菜、塚田佳都、野口 彩、の場久実、三浦彩歌、  
山崎 優、山本美幸、吉田由貴

製作・主催：フェスティバルトーキョー

Text: Elfriede Jelinek  
Translation: Tatsuki Hayashi

Direction: Akio Miyazawa  
Cast: Tomoko Ando, Kiyomi Tanigawa, Shoko Matsumura,  
Chise Ushio, Minami Oba

Stage Design: Akio Miyazawa  
Music: Keiichi Sugimoto (FourColor/FilFla)  
Lighting: Ayumi Kito  
Sound: Daisuke Hoshino (Sound Weeds Inc.)  
Costumes: Chiyo Sakamoto  
Stage Manager: Tsubasa Tanaka (capital inc.)  
Props: Chie Hasegawa  
Assistant Direction: Satoshi Kamimura, Satoe Abe  
Production Co-ordination: Takako Kanenaga

In co-operation with ARICA, Theatrical group En  
Production Co-operation: U-ench Saisei Jigyodan, roa-polo, Co., Ltd.

Photography: Tsukasa Aoki  
Video Documentation: Saikoudo Co., Ltd.

F/T Staff  
Production Manager: Tomoya Takeda  
Production Co-ordination: Aya Komori  
Assistant Production Co-ordination: Akiko Juman  
Front of House: Izumi Endo  
Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program (YAMP): Asami Inui,  
Makoto Uemura, Miki Kawamata, Sumire Koshimizu, Niina Sugai,  
Keito Tsukada, Aya Noguchi, Kumi Matoba, Ayaka Miura,  
Yu Yamazaki, Miyuki Yamamoto, Yuki Yoshida

Produced and Presented by Festival/Tokyo

## フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
樋川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (50音順)

## フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末弘昌	豊島区文化工部局長
委員	八巻規子	豊島区文化工部局文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井和幸	北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

## フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 桐山由香、高橋マミ、戸田史子

## 公募プログラムコーディネート

メディア戦略・広報	小山ひとみ
メディア戦略・広報アシスタント	松本花音
オープン・プログラム	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラムアシスタント	藤井さゆり
票券	田野入涼子、後藤天
票券アシスタント	長原理江
チケットセンター	常澤淳、伊指敏
総務	佐々木由美子、佐藤久美子
経理	葦原円花、一色壽好
	堤久美子、青木亮子

## 技術監督

技術監督アシスタント	寅川英司
照明コーディネーター	河野千鶴
音響コーディネーター	佐々木真真子 (株式会社ファクター) 相川晶 (有限会社サウンドーズ)

## アートディレクション+デザイン

ウェブサイト	アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
パブリシティ	濱田真一+北島謙子+重松信 (株式会社フロフトワーク)
海外広報・翻訳	平昌子、望月章宏
物販	アンドリュース・ウィリアム
編集・執筆	渡辺淳 鈴木理映子

## 主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会

東京都・豊島区・アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団)・公益財団法人としま未来文化財団・NPO法人アートネットワーク・ジャパン  
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター  
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー  
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

後援：外務省、公益社団法人日本芸術家連盟団体協議会  
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東京鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、  
チャコト株式会社  
協力：東京商工会議所豊島支店、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋イベント推進協力会、池袋ホテル会  
メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潟、CINRA.NET、美術手帖  
ホテルパートナー：サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、  
カラオケ店池袋  
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり  
宣伝協力：株式会社ホステス・ハウス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)  
会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)  
認定：公益社団法人企業メセナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

【会期】平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院萌、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾壺沙美、今井美希、榎村真、大田 久、緒方真由、紙 弘香、川又美樹、栗田知宏、奥水すみれ、  
崔 瀧、作原飛鳥、佐藤成行、澤田 隆、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、吉川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花鈴、嵯 朝美、嶋久美、三浦彩歌、水野美奈、守山真利恵、山崎 倫、山本美幸、吉田恭大、吉田由貴

F/T/ML：青木菜々絵、青木由香、青柳佳代子、阿原乃里子、別荘真由子、館森明香、五十嵐結子、石川世梨、石川拓夫、堀又義雄、今泉友来、岩城春寿、大原尚子、大嶋純子、大津佑子、大村真央、大和田真未、  
岡本静華、小野寺あす子、小野菜津美、鐘味佳代、片桐根子、加藤真帆、加藤佑麻、金子環美、川島佳子、桐谷佳美、工藤咲咲、桑島剛史、鷲宮衣子、小平怜奈、五藤 真、後藤真哉、小林淳平、齋藤  
利央子、崎濱梨枝、佐藤裕香、佐藤直子、染田 光、清水裕加里、常島楓子、杉崎由佳、鈴木明子、鈴木朋子、岡島悠生、平里梨香、平 七海、高田信隆、高橋 類、高松童子、蓮川向子、竹之内さやか、竹之内薫子、  
田中佑、手塚 哲、寺元奈津美、照沼詔尊、戸塚 碧、藤田知子、ドラクサンゼン、中村直樹、中村光子、中村優子、中野野斗、西本健吾、平松里子、広田 牧、藤田 輝、藤田 暁、藤林さくらよ、ブリジット、コナー、  
古庄美和、堀越時芽子、溝口 凜、村川莉子、村田陽亮、百瀬美樹、矢田沙和子、山口侑紀、山科有良、米谷今日子、四方田満子、和田幸子、渡邊早紀ほか

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>  
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛  
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。

## Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuohara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

## Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City  
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimaru, Arts Network Japan Director  
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City  
Committee Members:  
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section  
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation  
Masako Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation  
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative  
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director  
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City  
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

## Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma  
Administrative Director: Naoko Hasuake  
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima  
Production Manager: Tomoya Takeda  
Production Co-ordinators:  
Chika Kawai, Oriie Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda  
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama  
Media Strategy: Kanon Matsumoto  
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura  
Open Program: Sayuri Fujii  
Open Program Assistants: Suzuki Tanoiri, Takashi Ogi  
Ticket Administration: Rie Nagahara  
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyomyong Yoon  
Ticket Center: Yukiko Sasaki, Kumiko Sato  
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishishi  
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

## Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kuno  
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)  
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

## Art Direction + Design: Asy (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shinichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (ofwork Inc.)  
Public Relations: Masako Arita, Akhiro Mochizuki  
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews  
Merchandise: Jun Watanabe  
Editor/Writer: Rieko Suzuki

## Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Association for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

## Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO

Special co-operation from SEIBU IBEKUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IBEKUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Caccott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association

Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINKO, CINRA.NET, Blixtus Techo

Hotel Partners: Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Haru's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013